立命館地理学　第 26 号（2014）35-46

近藤豊写真資料のデジタルアーカイブ構築と過去の景観

―写真資料の GIS 化を通して―

村上　晴澄 *・佐藤　弘隆 **・矢野　桂司 ***・福島　幸宏 ****・土橋　　誠 ****

Ⅰ．はじめに

本研究は、GIS と Web ベースマップを用いたデジタルアーカイブを構築し、膨大な数の古写真資料をインターネットを通して容易に閲覧できるようにすることを目的としている。本研究が対象とする古写真資料である近藤豊写真資料は、寺社建築を中心とする写真ネガであり、建築史の研究者であった近藤豊氏によって昭和初期から撮影されたものである。その総数は、第一次寄贈分のみでも 59,974 枚あり、撮影時期は 1930（昭和 5）～ 1983（昭和 58）年にまで及ぶもので、現在は京都府立総合資料館に寄贈されている。これら約 6 万枚におよぶ近藤豊写真資料を効率よく閲覧・活用するためには、撮影場所を示した地図から写真やその情報を閲覧できるデジタルアーカイブの構築が欠かせない。

すでに、インターネット上で公開されている古写真データベースは数多く存在する。例えば、長崎大学附属図書館「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース [1)]」、「写真で見る滋賀の 20 世紀 [2)]」などでは、都道府県・市町村レベルで撮影場所が特定されており、地図やキーワード・年代からの写真検索も可能である。東京国立博物館「東京国立博物館古写真データベース [3)]」は、各寺院ごとに写真を分類しており、寺院名で写真を探すことができる。京都府立総合資料館「京都北山アーカイブス [4)]」では、大正～昭和初期のものを多く含む京都の風景をはじめとする写真資料を撮影者やテーマごとに分類するといった工夫がされており、目的の場所の写真を検索しやすいように配慮されている。以上のように、古写真データベースは数多くインターネット上で公開されているものの、その大半が写真の撮影場所が建物レベルで特定されたものではなく、都道府県・市町村レベルのものである。

そこで、2013 年度から立命館大学と京都府立総合資料館との共同研究で、近藤豊写真資料全点のデジタルアーカイブの作成および Web 上での公開に向けた準備を進めている。この第一段階として、近藤豊写真資料のうち戦前の韓国の写真に関しては、試験的に Google Earth をベースとした閲覧システムの

*　立命館大学大学院文学研究科・研修生
**　立命館大学大学院文学研究科・院生
***　立命館大学文学部
**** 京都府立総合資料館

キーワード：近藤豊写真資料、デジタルアーカイブ、過去の景観、GIS、地図化
Key words：Historic Building Photo Images, Digital Archive, Past Landscapes, GIS, Mapping

構築を行った。具体的には、GIS 化された写真の撮影場所と、デジタル化した写真画像および撮影年月日などの情報とをリンクさせ、膨大な数の写真をすぐに閲覧できるデジタルアーカイブを構築した。また、撮影場所を地図上に表示することにより、近藤豊氏が韓国で調査対象としていた建築物は主に仏教寺院であること、さらに調査対象や調査年月日、訪問回数などを明らかにした[5)]。今回、近藤豊写真資料全点のデジタルアーカイブを作成するにあたって、一般に広く普及している Web ベースマップである Google Maps を用いたデジタルアーカイブを構築している。Web ベースマップを用いたデジタルアーカイブの構築による利点は、Web ベースマップ上の地図から写真の撮影場所を探し、容易に写真や撮影日時等の情報を閲覧することができる点である。近藤豊写真資料のデジタルアーカイブは、例えば大規模な寺院の伽藍内の本堂・楼閣といった建物レベルで撮影場所を特定していることが特徴である。

次章以降では、以上のような近藤豊写真資料のデジタルアーカイブの概要を述べるとともに、近藤豊氏の著書等で取り上げられなかった、撮影場所の地図化を通して得られる知見を、祇園祭および集落景観を例として紹介する。

II．近藤豊写真資料とデジタルアーカイブの概要

近藤豊写真資料は、先述したとおり、1930 ～ 70 年代にかけて撮影された約 6 万点におよぶ写真ネガである。これらの写真を撮影した近藤豊氏は 1909（明治 42）年に京都市に生まれた。中学時代から建築、とりわけ寺社建築の装飾をはじめとする細部意匠や細部文様に興味を持ち、京都大学工学部建築学科在籍時には、建築史研究者の天沼俊一教授の指導を受けた。その後は、大阪教育大学家政学部・摂南大学工学部建築科教授等を歴任し、寺院や洋風建築の修復監督なども担当しつつ、日本中の寺社を中心とする建築を調査した。全国の寺社を調査して記した著書として、『古建築の細部文様[6)]』『古建築の細部意匠[7)]』『祇園祭　鉾立と細部意匠[8)]』などを記し、1994 年に逝去した。

近藤豊写真資料の内訳をフィルムの種類別に分けると、主に戦前の硝酸フィルムで撮影したものが 739 枚、戦前から戦後にかけてのガラス乾板が 913 枚、戦後の 6 × 6 フィルムによるものが 58,322 枚である。その撮影対象は、寺社建築を中心に、近代建築、住宅、鉾山等に及び、とりわけ近藤豊氏の専門分野であった寺社の装飾をはじめとする細部意匠・細部文様の写真が多い。撮影対象とした寺社は、大規模な伽藍や複数の塔頭を持つ寺院から村落にある小さな祠まで様々である。撮影場所別に分けると、京都府が約 26,400 枚（うち京都市約 22,700 枚）と最も多く、次いで滋賀県約 9,000 枚、奈良県約 7,500 枚、大阪府約 2,700 枚、兵庫県約 2,100 枚と関西が多い。これは近藤豊氏の活動の場が関西中心であったことに加え、関西に寺社建築が多いことが関係している[9)]。その他に韓国の写真も約 1,500 枚存在し、撮影場所が関西を中心とする日本各地と韓国という極めて広範囲にわたっている。

デジタルアーカイブの作成にあたって、膨大な数の写真の撮影場所を GIS 上で特定するとともに、当時のネガをスキャンして写真のデジタル化を行った。そして、撮影場所を

示すGISデータを用いてWebベースマップを作成し、撮影場所を示した地図上のポイントをクリックすることで、写真画像と概要を閲覧できるシステムを構築した。Webベースマップ構築のためには、まず撮影対象物の名称・年月日等のリストと写真のデジタル画像が必要である。はじめにネガ番号・撮影場所・日時などの表を作成し、Google Mapsなどで検索した写真撮影場所の地理座標（経緯度のx、yデータ）を付加する。この地理座標付きのデータをGISソフト上に取り込み、撮影場所のポイントデータを地図上に表示するシステムを構築する。このデータをGoogle Mapsをベースとした地図に表示させ、スキャンした画像データとリンクさせることで作業は完了する。単純ではあるものの膨大な数の資料のため、相当な時間を必要とする作業である。

ここで、現在作成しているWebベースマップについて、東大寺を例として説明する。Webベースマップは、Google Maps上に写真の撮影場所のポイントが表示される仕組みである（第1図①）。同じ場所で複数枚の写真が撮影されている場合もポイントは1つとなっている。背景のマップは一般のGoogle Mapsと同じく、カラー地図と航空写真のほかモノクロ地図を選択できる。マップ上のポイントをクリックすると、そこで撮影された写真一覧が下部に表示される（第1図②）。下部に表示された一覧内の写真をクリックすると、拡大写真と撮影年月日などが表示される（第1図③）。この拡大写真をクリック

第1図　近藤豊写真資料デジタルアーカイブの試験公開画面

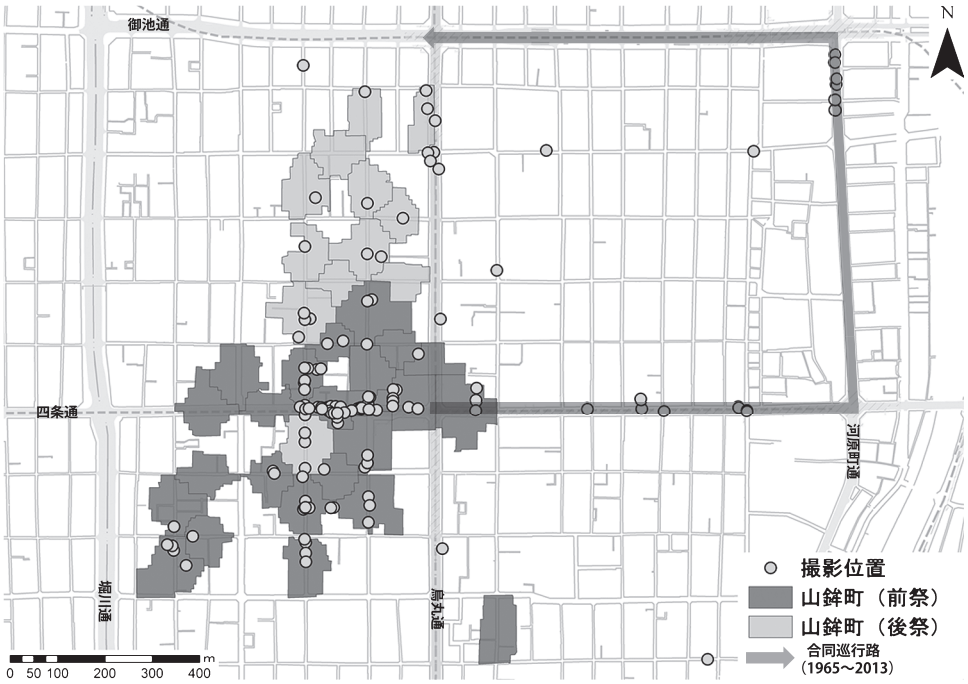
すると、別ウィンドウでさらに大きな写真として表示される。Web ベースマップから撮影場所を探すことができるため、古民家のように住所など検索キーワードがわからない対象物を探すときにも有用である。さらに、キーワードによる検索機能もあり、寺院名などを入れることで特定の寺社などをすぐに検索することも可能である。撮影場所が容易にわかるように、例えば大規模な伽藍の寺院は、山門・本殿などそれぞれ撮影した建物ごとにポイントを付すといった工夫を施した。

Ⅲ. 高度経済成長期の祇園祭山鉾行事

近藤豊氏は 1957（昭和 32）年から 1975（昭和 50）年にかけての 18 年間で約 2,700 枚の祇園祭に関する写真ネガを残している。第 2 図はそれらの撮影場所をポイントで表した地図であり、山鉾町[10] と山鉾の巡行路を中心に撮影されている。近藤豊氏は神輿渡御や八坂神社での神事など様々行事が行われる祇園祭の中でも、山鉾行事に関心があったとみられる。

その山鉾行事のハイライトとなるのは 7 月 17 日の山鉾巡行である。近藤豊氏は 1965（昭和 40）年から 1975（昭和 50）年うち、7 年分の巡行の写真を残している。第 3 図では 1965（昭和 40）年、1967（昭和 42）年、1969（昭和 44）年の巡行の撮影位置を示しているが、近藤豊氏は年によって撮影場所や撮影対象を絞っており、目的を設定して撮影に臨んでいたことが伺える。

巡行の写真で特に注目したいのが後祭の写真である。本来、祇園祭の山鉾巡行は、神を八坂神社から市中に迎える 7 月 17 日の神幸祭と八坂神社に返す同 24 日の還幸祭の 2 度の神

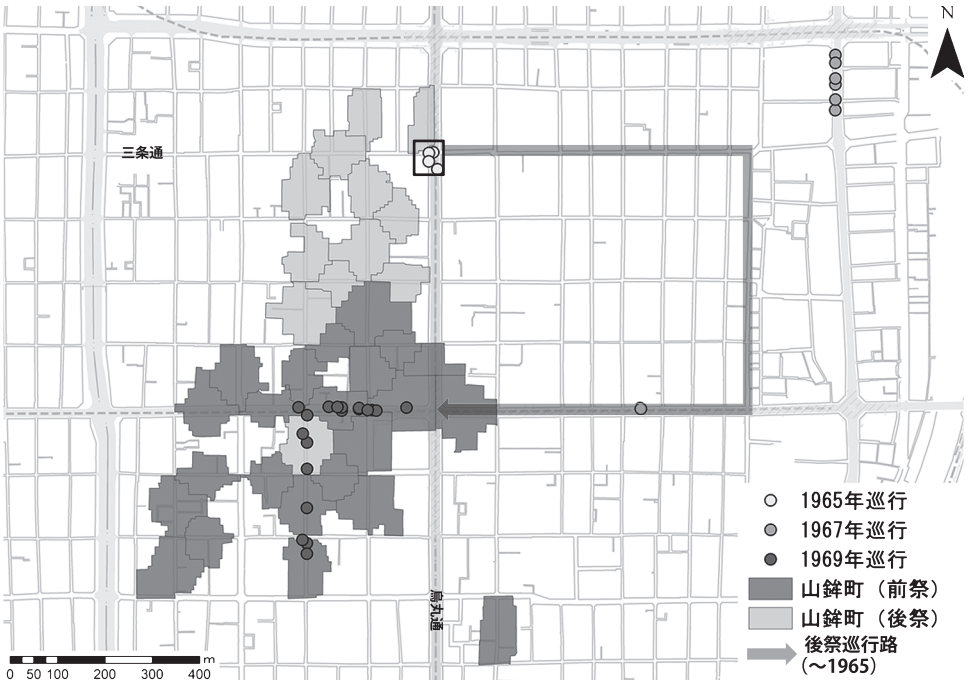


第 2 図　祇園祭関連の撮影位置

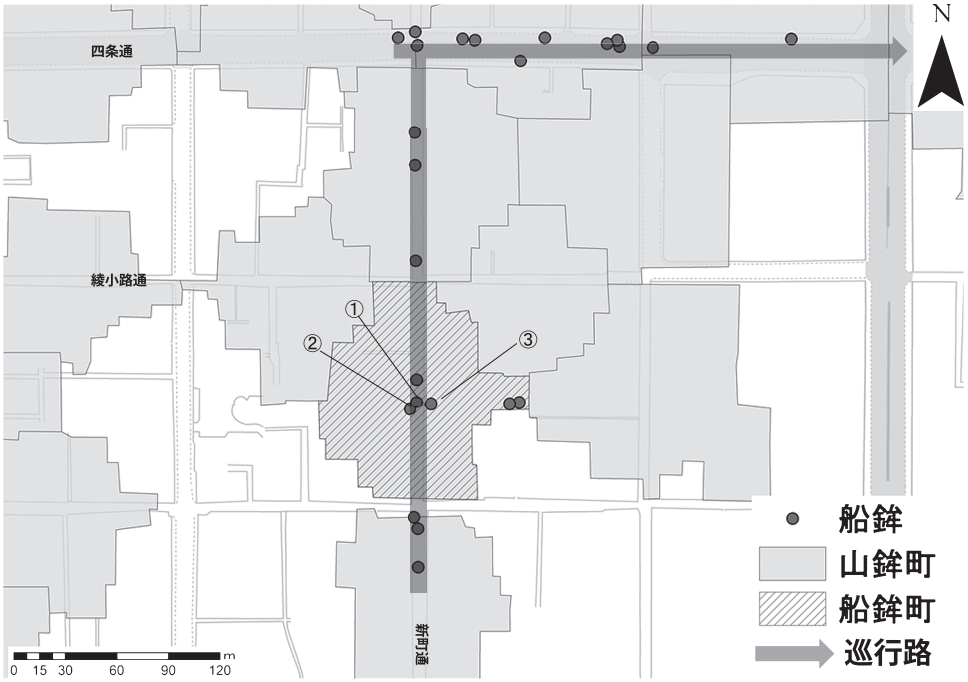
輿渡御に付属しており、17 日に前祭、24 日に後祭と 2 度行われる行事であった。しかし、1965（昭和 40）年を最後に 2 度の巡行は同日の 17 日に 1 本化され、前祭に後祭が続く形となった[11)]。近藤豊写真資料には、後祭の最後の巡行の様子が 16 枚残されている。

それらの撮影場所はいずれも烏丸三条周辺である（第 3 図の太枠）。後祭の各山は烏丸三条に集合し、そこから東へ巡行を進めた。第 4 図は三条通から烏丸通へ抜けてきた北観音山である。三条通は東海道の終着点につながることで、京都の主要通りとして栄え、近代以降は銀行などの近代建築が多くみられるようになった通りである。そのような京都の都市の発展を考える上で重要な通りにおいて、都市に住む人々の発展の象徴である祇園祭の山鉾が巡行していたことを示すこの写真は、京都という都市の歴史を考える上でも重要なシーンといえる。近藤豊氏が後祭の写真を残しているのはこの年のみで、前祭に比べ関心が低かったことがうかがえる。しかし、いざ後祭がなくなるということで、近藤豊氏をはじめ京都に住む人々の多くは

第 4 図　三条通から烏丸通へ出る後祭の北観音山（1965 年 7 月 24 日）



第 3 図　山鉾巡行（1965 ～ 1967）の撮影位置
注：太枠は 1965 年の後祭



第５図　船鉾の撮影位置
注：番号は第６～９図の撮影位置

第１表　船鉾町　祭りの日程

月	日	活動	場所	日	活動	場所
8～6	—	京絞り事業所	町会所（チョウイエ）			
	—	お囃子練習（1か月1回）	町会所（奥）			
	—	船鉾収蔵	町会所（収蔵庫）			
	—	打ち合わせ会（5月中旬）	成徳自治会館			
	—	京絞り撤収（6月末日）	町会所（チョウイエ）			
7	1	神面改め	滋賀銀行―町会所	14～16	お飾り場設置	町会所
	2	粽到着・吉符入準備	町会所		お囃子	町会所
		鬮取り式	京都市会本会議場		鉾拝観	町会所
	3	吉符入	町会所		粽・授与品販売	町会所
		お囃子練習	町会所	16	日和神楽	町会所―八坂神社
	4～9	お囃子練習	町会所	17	神幸祭	
		粽・授与品作り	町会所		山鉾巡行	町会所―巡行路
	11	鉾立て（やぐら）	町会所		人形片付け	町会所
	12	鉾立て（やぐら・甲板部）	町会所	18	町会所片付け	町会所
	13	鉾立て（車・懸装品）	町会所	19	御旅所奉納囃子	御旅所（四条寺町）
		曳初め	町会所―町内	24	還幸祭	後の祭
		お囃子	町会所		神輿迎え	後の祭
		鉾拝観	町会所		花傘巡行	後の祭
		粽・授与品販売	町会所	28	足洗い	町会所

この山鉾巡行の変化に関心を抱いたに違いない。

近藤豊氏は巡行だけでなく、各山鉾に関するあらゆるシーンを多く写真に残している。

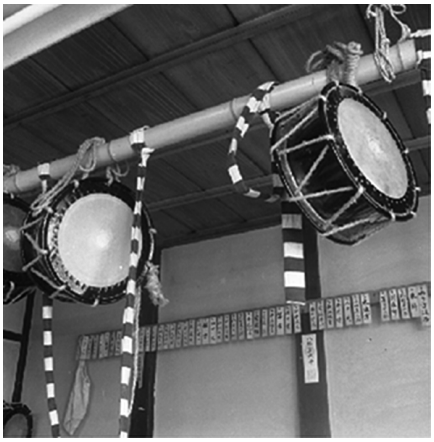
その中でも船鉾[12]を写したものは633枚もあり、山鉾の中でも最多である。それらの写真は第5図のように撮影されている。掲載枚数は、巡行路よりも船鉾町内での撮影枚数が圧倒的に多い。

祇園祭の山鉾行事のハイライトは17日の巡行であるが、山鉾町では第1表船鉾町の日程のように7月2日の吉符入りから授与品の準備、囃子の練習、鉾建て、曳き初め、宵山と祭りが進行される。近藤豊氏は毎年、鉾建てが行われる前後を中心に、町内での撮影を行っていた。また、撮影場所は町会所[13]とその周囲がほとんどで、年によって撮影場所が大きく変わるということはなかった（第6～9図）。

近藤豊氏が船鉾町内で撮影を行ったのは、

第6図　鉾上からの町内（第5図①、1966年7月15日）

第7図　鉾建てと町会所（第5図②、1967年7月13日）



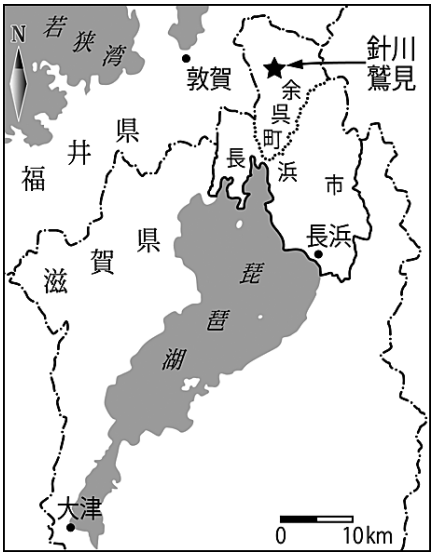
第8図　町会所内部（第5図③、1970年7月10日）

第9図　鉾建てと町会所（第10図②、1971年7月11日）

1957（昭和32）年から1975（昭和50）年までのうち13年分であり、高度経済成長期における船鉾町内での山鉾行事の運営の様子や街並みを伺うことができる。また、これらを時系列順に並べることで同じ時季、同じ場所の様子を経年的に見ることができる。このことから、高度経済成長期と現在における祭りの運営や街並みの比較や、高度経済成長期における祭りの運営や街並みの変化などを知るうえで、近藤豊写真資料は重要な資料であるといえる。

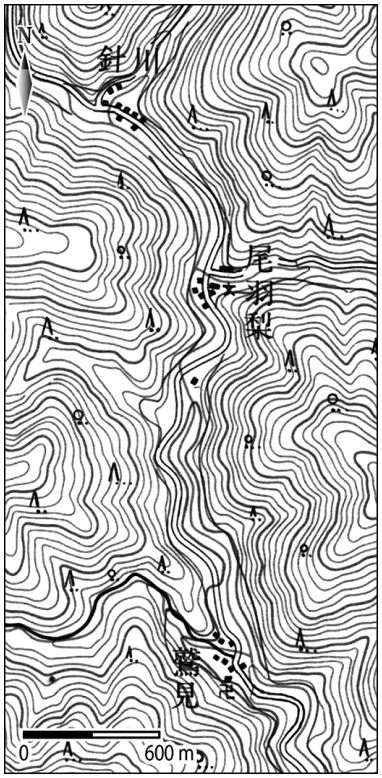
Ⅳ. 集団移住前の湖北の民家と景観

近藤豊氏の写真には、寺社建築のみならず、民家や学校、近代の洋風建築なども多数含まれている。本章では、民家や集落景観の写真を地形図とともに見ていくことにする。今回取り上げるのは、湖北地域と呼ばれる現在の滋賀県長浜市余呉町の中でも高時川上流の山間部に位置していた針川・鷲見集落の民家である（第10図）。針川・鷲見をはじめとする複数の集落はすでに廃村となっており、近藤豊氏によって撮影された写真は、集落が存在した頃の景観を知る上で貴重なものといえる。この地域は、積雪のため冬期は他村で過ごす世帯も存在したほどの豪雪地帯であることに加え、交通不便なことも要因となって過疎化が進行していたため、この地域では集団移住が行われていた。もっとも、この地域の生業が木炭生産や林業であり、戦後になると電気やガスの普及で木炭の需要が大きく減っていたことが過疎化の大きな要因であった。そこで、針川は1970（昭和45）年に集団移住し、無人口の廃村となった[14]。鷲見は針川などに続いて集団移住が計画されていたものの、資金難により挫折していた時に高時川ダム建設計画が浮上し、集落が水没することが決まった。そのため、最終的には過疎化による集団移住ではなく、ダム建設のために1990年代前半には残っていた全世帯が離村することになった[15]。



第10図　針川・鷲見集落の位置
注：現在、余呉町は長浜市に編入されている。

湖北地域の民家はこの地域特有の間取りや妻飾りが特徴で、外観は豪雪地帯に見られる萱葺き屋根を持つ形である[16]。この特徴ある民家の存在する針川集落が廃村となるということで、近藤豊氏はこの地域へ撮影に出かけ、鷲見集落でも撮影を行った可能性が高いと考えられる。ここで、針川の写真を地形図とともに見てみよう。5万分の1地形図を見ると、針川は山間部の川沿いに位置し、集落へ通ずる道は一本のみであることが読みとれる（第11図）。まさに木炭生産や林業が主産業であったことがよくわかる。集落の写真を見ると、茅葺き屋根の古風な家々が立ち並ぶ背後には、地形図のとおり山々が迫っ



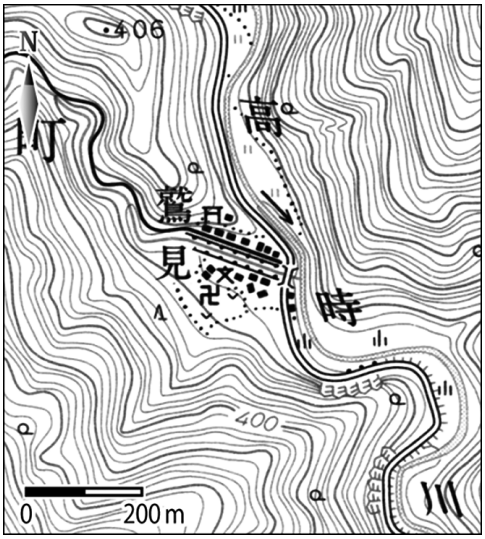
第 11 図　地形図に見る針川・鷲見
注：5 万分の 1 地形図「敦賀」（昭和 45 年資料修正）を使用。

第 12 図　針川集落の景観（1968 年 8 月 27 日）

第 13 図　竹を用いた妻飾りの茅葺き屋根（針川・1968 年 8 月 27 日）

第 14 図　茅葺き土蔵（針川・1968 年 8 月 27 日）

ていることが見て取れる（第 12 図）。茅葺き屋根の細部を写した写真からは、湖北の民家の特徴である竹で押さえた妻飾りがよく見える[17]（第 13 図）。さらに、近藤豊氏はこの地域特有の茅葺き屋根の土蔵も撮影している（第 14 図）。次に、鷲見の写真を見てみよう。当時の 2 万 5 千分の 1 地形図を見ると、川に沿って家々が真っ直ぐに立ち並ぶ鷲見の特徴を読み取ることができる（第 15 図）。ここで集落写真を見ると、地形図で確認できたように、川に沿って萱葺きの家々が立ち並んでいる様子を窺える（第 16 図）。別のアングルから撮った写真を見ると、立ち並ぶ民家は同じ形態をしており、おそらく内部も同じ間取



第 15 図　地形図に見る鷲見
注：2 万 5 千分の 1 地形図「中河内」（昭和 48（1973）年改測）を使用。

第 16 図　鷲見集落の景観（1968 年 8 月 29 日）

第 17 図　鷲見集落を見下ろす（1968 年 8 月 29 日）

第 18 図　民家の囲炉裏（1968 年 8 月 29 日）

りであると想像できる（第 17 図）。また、ある民家の内部を撮影した写真には、使用されていたと推測できる囲炉裏が写っている（第 18 図）。このように近藤豊氏が撮影した写真からは、民家や集落景観に加え、民家の内部の生活様式などを物語る写真も多いことが特徴である。現在も湖北地域には茅葺屋根の民家が残っている集落も存在する。しかし、トタン葺きの屋根に替えられているものも多く、撮影した民家すべてが茅葺きの集落写真は、当時の景観を知ることのできる貴重な資料であると言えよう。

以上のように、近藤豊氏が撮影した写真からすでに廃村となった集落の景観が判明し、地形図と見比べることでより具体的に当時の集落景観を知ることができる。また、地形図からは建物の姿はわからないため、現存する写真資料は、当時の建物や景観を知る上で極めて重要である。その意味では、これら湖北

の民家の写真は現存する寺社の写真とともに貴重であるといえよう。

V．おわりに

第Ⅱ章では、近藤豊写真資料の概要及びデジタルアーカイブ構築過程を中心に紹介した。この中で、Web ベースマップを用いたデジタルアーカイブを構築することにより、地図上から写真へと容易にアクセス・閲覧できることを述べた。膨大な数の写真撮影場所の特定からデジタルアーカイブ作成に至る流れを紹介し、撮影場所の特定や写真のスキャン作業は写真 1 枚ごとに進める必要があり非常に時間のかかる作業であるものの、一度デジタルアーカイブを構築すると、閲覧が極めて容易となる。現在公開されている他の古写真データベースとは異なり、建物レベルの精度で撮影場所の位置情報を 6 万件近い数の写真を地図上から写真を検索できる点が画期的であることに言及した。これは、近藤豊氏が撮影場所を詳細に記録しているため、撮影場所を特定できたといえる。

第Ⅲ・Ⅳ章では、祇園祭と村落景観を例に、写真の撮影場所やその場所の地理的な視点からの解読を行った。とりわけ地形図などと比較することにより、撮影場所のみならず、撮影場所の景観や地域の様子がわかるといえる。第Ⅲ章では、祇園祭のように現在の場所との対比などから詳細に撮影場所や方向を復原できる場合は、近藤豊氏が写真を撮影した目的を考察できることが判明した。また、祭りの運営や現在までの景観の変化をみることができた。第Ⅳ章で取り上げた湖北の民家の写真からは、過疎化による集団移住のため廃村となった針川・鷲見集落が存在した当時の地形図を見ることで、民家の存在した場所の地勢や景観をイメージできることを明らかにした。さらに、近藤豊氏の写真からは、実際の集落や民家の様子を窺い知ることができた。

本研究では、撮影日時等の一覧データを作成し、膨大な数の写真の撮影場所を特定するとともに、ネガのスキャン作業も行った。この作業により、閲覧したい写真を Web ベースマップ上から写真を容易に探し出したり、または閲覧したい写真のキーワードから写真を検索できる。その一方で、写真によっては、今となっては建物が失われ景観も変化し、建物レベルの精度で撮影場所を特定することが困難であったものも多く存在する。この点は、今後の課題であるといえる。デジタルアーカイブは写真を閲覧することがすべてではなく、第Ⅲ・Ⅳ章で考察したように撮影対象物の考証を行ったり、撮影方向などを検討したりすることも可能である。写真資料を用いた研究の進展のためにも近藤豊写真資料は貴重なデータベースであるということができる。

〔付記〕本研究の写真資料のデジタル化の一部には、平成 25 年度文部科学省科学研究費助成金・研究成果公開促進費「近藤豊写真資料」（代表者　矢野桂司）を用いた。
なお、本稿の写真は全て近藤豊写真資料（京都府立総合資料館所蔵）からのものである。

注

1）長崎大学附属図書館ホームページ「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/area.html（2014 年 6 月 24 日最終閲覧）。
2）滋賀県ホームページ「写真で見る滋賀の 20 世紀」http://www.pref.shiga.lg.jp/20seiki/（2014 年 6 月 24 日最終閲覧）。
3）東京国立博物館ホームページ「東京国立博物

館古写真データベース」http://webarchives.tnm.jp/archives/work/391（2014年6月24日最終閲覧）。
4）京都府立総合資料館ホームページ「京都北山アーカイブス」http://www.pref.kyoto.jp/archives/index.html（2014年6月24日最終閲覧）。
5）Minsuk, K., Haruto, M., Toshikazu, S., Keiji, Y., Yukihiro, F. and Makoto, D.: Web-based Map and Digital Archiving for Korean Historic Building Photo Images taken by Dr. Yutaka Kondo during the 1930s and 1940s, Proceedings of KAGIS Fall The 15th KOREA & JAPAN International Symposium on GIS, 2013, pp. 232–235.
　金　玟淑・村上晴澄・瀬戸寿一・矢野桂司・福島幸宏・土橋　誠「日帝強占期における近藤豊撮影韓国写真資料に関する基礎研究」、韓国建築歴史学会　2013年秋季学術発表大会資料集、2013、pp. 103-108。
6）近藤　豊『古建築の細部文様』、光村推古書院、2013、219頁（初版1989年）。
7）近藤　豊『古建築の細部意匠』、大河出版、1986、164頁。
8）祇園祭『鉾立と細部意匠』、大河出版、1972、190頁。
9）前掲6）、はじめに。このなかで、関西や鎌倉に古建築が多く、取材対象は近世以降のものが多いと述べている。その理由として、近世以降は文様・装飾関係の内容が多方面に及び、現存する建築の細部文様が多いことを挙げている。
10）町内から山鉾を出す35町。うち2町は休み山鉾。
11）2014（平成26）年に後祭は復活したが、巡行ルートは当時とは異なり前年の巡行の逆回りルートである。
12）下京区新町通綾小路通下ル船鉾町から出される鉾。他の鉾とは異なり船の形をしている。
13）町会所とは近世の京都の町において寄合や年中行事を行う町有の施設である。祇園祭の山鉾町では、それらが祭の運営演出の中心として機能している。谷　直樹・川上　貢・高橋康夫「祇園祭山鉾町会所の建築」日本建築学会近畿支部研究報告集計画系、1975、445-448頁。
14）余呉町誌編さん委員会編『余呉町誌　通史編（下巻）』、余呉町、1995、567-576頁。
当時の余呉町北部における集落ごとの集団移住に関しては、この中に詳しく記されている。針川集落の人々の多くは、同じく余呉町内に建設された公営住宅などへ移り住んだ。
15）ふるさと丹生小学校のあゆみ編集委員会編『ふるさと丹生小学校のあゆみ』、余呉町、1990、179頁。近代以降の針川・鷲見をはじめとする集落の様子は、このなかに詳しく記されている。また、本稿で取り上げた針川・鷲見をはじめとする集落のカラー航空写真も撮影年次不詳ながら掲載されている。
16）吉見静子『古民家は語る：受け継がれてきた暮らし』、新評論、2013、12-30頁。
17）前掲16）、12-30頁。